

設計趣旨

郡山市公会堂（1924年）は「楽部」を掲げながら生の音楽に触れる機会が少ない郡山において、今でも合唱や管弦楽の演奏会が定期的に開かれる貴重な場であり、貴重な過去の遺産である。また、家々が建ち並ぶ住宅街に囲まれて屹立するその姿は、自ずと、公会堂という「過去」とそれを囲む「現在」の重層した空間となっている。

本計画では、時間の重層した場所に、人々が気軽に立ち寄り、集い、使うことのできる施設を集積させた。すなわち、公会堂を囲んで新たに野外ホールを設け、これら屋内外の劇場を囲む形で、地元出身の建築家の手紙を飾る建築ミュージアムやアーカイブ、そしてカフェなどの施設を点状させている。

これらの建築群の間から輝々に得られる公会堂への見通しは、この場所を、過去と現在とが重層・交錯し、協演する空間にする。これは公会堂と新たな建築群との、過去と現在が交差する劇場空間なのである。

住宅街の劇場空間



敷地



郡山市公会堂

敷地説明

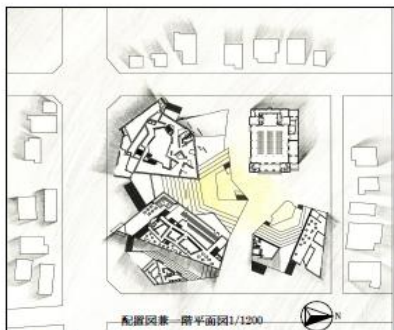
郡山市の文化ゾーン・麓山は、住宅街に囲まれ、敷地には固有な文化財の郡山市公会堂（1924年）が建つ。

デザイン

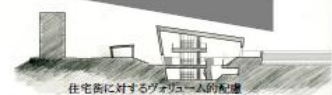


震災で壊れた建物

重層と交錯。東日本大震災をはじめ、日本は過去、数多くの災害に見舞われてきた。しかし、時の経過とともに記憶は薄れ、日常を取り戻すや忘れ去られる。過去が数回となるために、建築ができることは何か。日常の中に、日常でない、災害を彷彿とさせるデザインが施されていることが、その方策となり得るのではないか。野外ホールの傾斜にあわせて傾きながら配置された建築群は、重層と交錯というキーワードから導き出されている。このデザインは、1つには、先に挙げた時間や視線といった様々な要素の交差を表現したものである。いま1つには、シエナ（イタリア）のカンポ広場の傾斜した広場に人々が集う姿やその輪廓に施された幾何学模様によるインスピレーションを受けたものである。そして、さらには、このように損なわれがちな人々の危機への備えを、日常の中で潜在的に意識させるためのものでもある。



配置図兼一階平面図1/1200



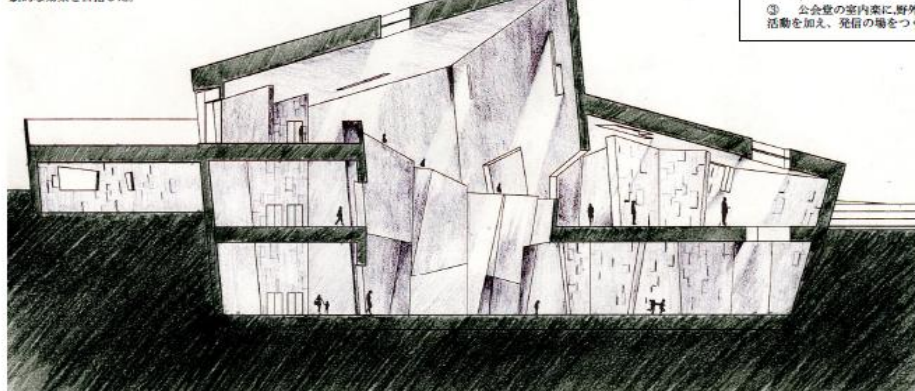
住宅街に対するヴォリュームの配慮



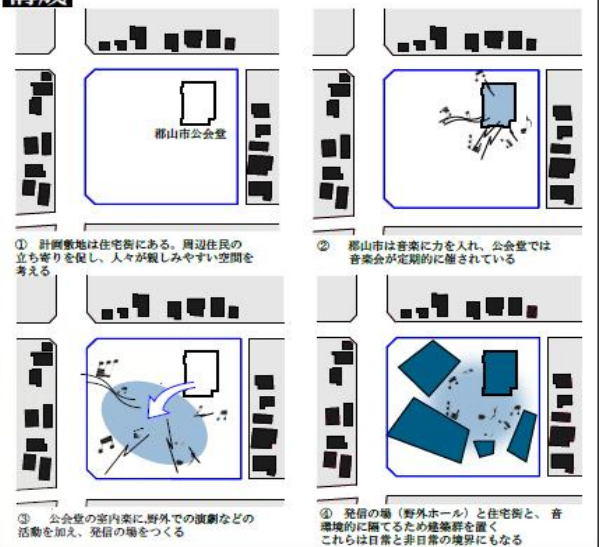
シエンナ広場（シエナ）

内観

大きな吹き抜けのある閉鎖的な層の中に天窓から降る光が織りなり、劇的な効果を目指した。



構成



美術館展示室 内部パース

